

文学博士佐藤輝夫君の「ローランの歌と平家物語」に対する

授賞審査要旨

本研究の前篇では、フランス中世文学の「語り物」類型に属する叙事詩 *chansons de geste* 群中最も古く、規模も最大な『ローランの歌』の各地（仏・伊・英など）に残存する少くとも七種以上の写本を実証的に比較吟味して、
○本即ちイギリス・オクスフォード大学ボドレイヤン文庫秘蔵の写本が最も古く、且つ「物語」の全貌を最も完全に伝えるものであることが解明される。その間、フランシスク・ミシエルからジョゼフ・ベディエにいたるまでのフランス国文学者たちの考証研究が綿密に点検され紹介される。（第一部第一章―第四章）また、七七八年八月ピレネー山脈のロンスヴォーの谷において、シャルルマーニュ大帝麾下のローランが二万の軍兵とともにサラセン軍の反撃に会って討死した事件前後の史実と、この史実から生れた各種の伝説とを極めて詳細に照合し、作品としての『ローランの歌』の成立過程を明らかにしている。（第二部第五章―第八章）

本研究の前篇は、『ローランの歌』写本に関する今日までの諸学説の集大成であり、新資料の発見が今後ない限り、諸外国にも恐らく類例がないものとなるだろうし、我が国においても、これを凌駕する考証研究の出現は当分望むべくもないだろう。十数年に亘る著者の努力には敬服せざるを得ない。尚『ローランの歌』の原典を解説するためには、中世フランス語に対する豊富な智識がなければならないことを附言する。

後篇においては、近時我が国に見られる盛大な『平家物語』研究の成果を十分に踏まえて、外国文学研究者の立場より『平家物語』の構造を分析し、(第一部)著者専門の『ローランの歌』と具体的に比較し、(第二部)同じ「語り物」としてのこの二つの作品に見られる幾多の相似性・近似性が指摘される。特に一家門・一王朝の滅亡に絡まる「ほろび・哀感」の主題や戦闘描写及び英雄「造型」法におけるこの東西二大叙事詩の類似性が、多くの引例によって論述されている。その結果、著者は、世界文学中に正しく位置付けられてしかるべき『平家物語』の価値を力説している。そして、この提唱が、昭和三十九年バルセロナにおける「西洋叙事詩学会」Société Renaissanceの大会で公表されて以来、欧米諸国の学者たちは『平家物語』に驚異の眼を向けるにいたっている。

前篇の考証研究は、我が国にあって原典考証という地味な研究に従事する学者たちを鼓舞すること大なるものがあり、後篇は、外国文学研究者が我が国の国文学者の指導と協力とにより国文学研究に寄与し得る新しい道があることを示している。